

学会ハイライト

第34回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を終えて

(2018年7月6日, 7日 浜松市, アクトシティ浜松)

戸倉 新樹

浜松医科大学皮膚科学講座 教授

学術大会開催までと西日本豪雨

第34回日本皮膚悪性腫瘍学会 (Japanese Skin Cancer Society : JSCS) 学術大会を, 2018年7月6日, 7日に浜松市で浜松医科大学皮膚科学教室が担当させていただいた(図1). 浜松医科大学が開催校になるのは2006年の瀧川雅浩名誉教授以来である.

学会はたいへんな災害をおこした「平成30年7月豪雨」の最中に開催された. 西日本を中心に全国的に広い範囲で記録された台風7号および梅雨前線などによる集中豪雨である. この学会記を書いている時点でも被災地での作業は続いており, いち早い復興を祈るばかりである. この西日本豪雨のため, 大阪以西あるいは北陸からの参加は困難を極めた. また参加しても7月7日に帰宅することができなくなった方々もおられた. そのような状況で時間をかけ体力を消耗しながらもご参加いただいた方々には, 心より御礼申し上げたい.

ご存じのように皮膚悪性腫瘍の分野は, 近年, 他臓器の悪性腫瘍と同様に, 興味深い知見が次々と生まれ, 治療応用が続々となされている領域である. メラノーマの治療の話題は相変わらず盛んであり, 併用療法と副反应对策に向けて次の段階に入っている. また皮膚リンフォーマについても新規治療薬の治験が行われ, また従来治療の投与法の見直しなど大きな展開がみられている. こうした皮膚悪性腫瘍についての知見をアップデート

するとともに, 本学術大会では何か従来の年次大会にはないものをフィーチャーしようと考えた. そこで, テーマは「日韓コラボ・他科コラボ」とした.

加えて理事長に就任された尹 浩信先生の意向もあり, 一般演題に基礎研究のセッションを設け



図1 学術大会ポスター



図2 韓国皮膚科医との交流. 前列右2人は大原國章先生と泉 美貴先生

て、成果を発表する場を提供することによって、基礎研究を学会としても推進するように図った。加えて、当教室の同門会員で浜松医科大学1期生の松本吉郎日本医師会常任理事には診療報酬改訂について、岩月啓氏先生、片山一朗先生、栗原和幸先生(後述のデルマトオーケストラのチェリストとしても活躍)には退任に際しての臨床家の道標をお話いただいた。その他、スペースの関係で御名をここに記すことはできないが、4つのシンポジウム、3つのスポンサードシンポジウム、3つの教育セミナー、2つのスポンサード教育セミナー、6つのランチョンセミナーでは、現在アクティブに活躍されているそれぞれのテーマのエキスパートにご講演をいただいた。

以上のように学術大会は盛りだくさんの内容になったが、どの分野に興味をもつ方にも勉強していただけたと思っている。以下、本大会に特徴的なセッションについて概説したい。

学術大会テーマ「日韓コラボ, 他科コラボ」

これまで私、また教室のメンバーは韓国の皮膚科医の方々と盛んに交流してきた。私自身は、研究皮膚科、光皮膚科学、リンフォーマ、アトピー性皮膚炎などの分野で交流し、教室の伊藤泰介病院准教授は毛髪学の領域で意見交換してきた。日

本全国の施設をみれば、乾癬、美容皮膚科などの分野で韓国との交流が盛んである。皮膚悪性腫瘍学会学術大会の機会を捉え、さらに一堂に会して悪性腫瘍での交流を深めたいと考えた。韓国は隣国ではあるが海を隔てているため、皮膚腫瘍に対してどんな考えをもち、どんな医療を行っているかは謎の部分もある。そこで「日韓コラボ」を企画した。また病理、放射線科をはじめとする他科の先生方には日々お世話になっており、しかも聞きたいことが多々あり「他科コラボ」も同時に企画した。こうしたコラボの一端を本学会で会員の皆様に共有していただければと思ったわけである。

日韓コラボ

「日韓コラボ」実現には、幸いJSCSに対応する韓国のKorean Society for Skin Cancer (KSSC)の全面的な協力が得られた。当初、KSSC設立者の1人であるProf. Kwang-Hyun Choが積極的にまとめてくださり、10名規模のKSSCの主要メンバーを連れて行くという。資金が潤沢ではない旨を伝え、手弁当でよいとのことである。そこで不十分なおもてなししかできないが、多数のKSSCメンバーに来ていただくことにした。Cho先生に加え、Prof. Hyang Joon Park (President), Prof. Dong-Youn Lee (Secretary-General) のご尽力で7



図3 デルマトオーケストラのポスター

名の講演者をご紹介いただき、日本からもそれぞれ対応するテーマで7名の方々に講演いただき、2つのシンポジウムを企画した(図2)。メラノーマ、上皮系腫瘍、軟部腫瘍、病理、手術手技、免疫療法などについて、日韓の違いを念頭に置きながら発表・討論を行った。このシンポジウムに当たっては虎の門病院の大原國章先生に相談に乗っていた。深く感謝の意を表したい。

学会期間中に、シンポジウムのみならず種々の機会を捉えて、韓国からの皮膚科医と話す機会があり、そうした交流も盛んであった。

他科コラボ

放射線科の先生にご参加いただいた。アブスコパル効果は、放射線を照射することにより、腫瘍細胞の抗原に対する免疫系の認識が促進し、腫瘍免疫による治療効果が高まる現象である。日常的

にも、放射線照射により非照射部の腫瘍まで縮小した経験をもつ医師はかなりいることと思う。福島県立医科大学の鈴木義行放射線腫瘍学教授にご登壇いただいて、アブスコパル効果についてご講演いただいた。また兵庫県立加古川医療センター院長小川恭弘先生には放射線感受性を高める方法についてご発表いただいた。その他、静岡がんセンター副院長兼放射線・陽子線治療センター長の西村哲夫先生(デルマトオーケストラのトロンボーンも演奏)には血管肉腫の治療について、国立がん研究センターの大熊加恵先生には皮膚リンパ腫の治療についてお話しいただいた。

病理の先生にも何人かご登壇いただいた。日韓コラボのシンポジウムでは、岐阜大学の宮崎龍彦先生(トランペットも担当)、東京医科大学の泉美貴先生、教育セミナーでは関東中央病院の岡輝明先生(指揮も担当)に講演をお願いした。後述するように、とくに皮膚リンパ腫のclinico pathological conference (CPC)、シンポジウム、一般演題では病理の先生方に非常に貢献を賜った。

メラノーマ

メラノーマの治療は薬剤の使用経験が蓄積され、さまざまな問題が集約化されてきている。実臨床から免疫学的なメカニズムまで問題を整理し、集中的に討論するシンポジウムも設けることができた。「*BRAF*遺伝子変異陽性メラノーマの治療戦略」は実践的にしばしば遭遇する問題であり、パネルディスカッションでは単刀直入の意見を聞くことができた。「免疫チェックポイント阻害薬のirAEマネジメント」は、とくに内分泌系の障害が見過されやすいと感じており、よく知られたadverse event (AE)への対処はもちろんのこと、不定愁訴にも気を使う必要があることを認識した。「国内、海外治験の成績」もいくつかの重要な報告され、エビデンスを聞くことができた。

なんといっても本学会の重要なプログラムは一般演題であり、メラノーマについての興味深い演題が多数発表された。熱い討論があればこそ学会出席の意味があり、一般演題の重要性を改めて感

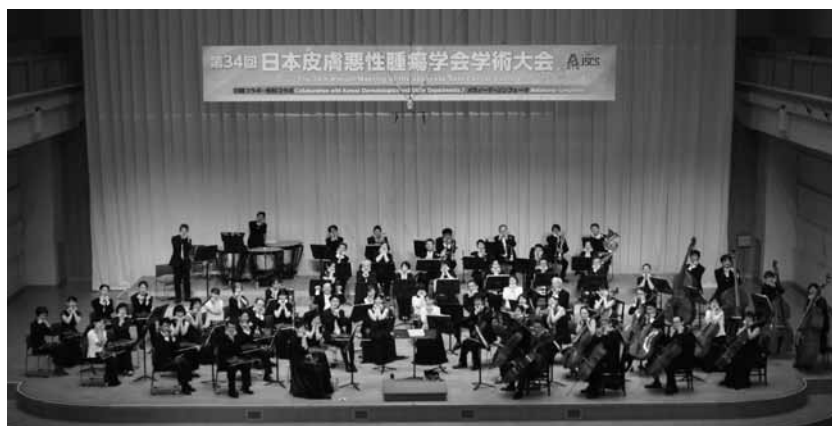


図4 デルマトオーケストラの演奏前の集合写真

じた。

皮膚リンフォーマ

浜松科医大学皮膚科は初代教授 山田瑞穂先生，二代教授 瀧川雅浩先生，そして私と皮膚リンフォーマの臨床・研究を行ってきた。この疾患は毛嫌いされることも多いかもしれないが，重要な疾患であることはもっと強調されていい。毎年次大会に倣い，CPCを含めて皮膚リンフォーマについても診断から新しい治療まで集中的な発表と討論の場を設けた。1日目の一部に加え，2日目の9～15時まではリンフォーマのセッションをずっと行った。CPCでは岡山大学の吉野 正先生，埼玉医科大学の新井栄一先生，広島市民病院の市村浩一先生というリンフォーマを専門とする3名の病理医にご参加いただき，何がキーとなるかということをも明らかにするために活発な討論がなされた。一般演題においても，これらの先生方を加えての激しい討論がなされ，十分聞き応えがあった。

治療に関しては，新規の薬剤の治験がなされつつあり，またすでに市販されている薬剤でもグローバルの治験により新たな使用法が模索され，話題が多かった。

デルマトオーケストラ

第2回「デルマトオーケストラ」演奏会を1日目の

懇親会前に文化活動として催した。第1回演奏会は2年前に日本皮膚科学会東部支部の折に行い，シューベルト交響曲第5番を演奏した。そのデルマトオーケストラ誕生記は「皮膚病診療39：666～671，2017」に載っており，参照されたい。今回また，オーケストラ演奏会の実行にちょうどよい規模の学会を浜松で開催させていただくことになり，第2回デルマトオーケストラ演奏会を実現させた(図3)。浜松は音楽の町，楽器の町であるし，さらに学会に合わせてアクトシティ中ホール(コンサートホール)も借りることができた。前回よりもっと大掛かりなブラームス交響曲第2番を70名近くで演奏した(図4)。「ブラ2」と通称されるこの曲の演奏はむずかしい。しかし美しい旋律と和ハーモニーが夏の湖畔の自然のイメージと一体になり，われわれを別世界に誘ってくれる。最後の圧倒的なクライマックスも高揚の極みである。私が大好きな曲でもあり，挑戦したい思いに駆られた。

オーケストラは奏者それぞれの技量はもちろん重要であるが，数十人からさらに曲によっては百人近くの集団が一丸となって同じ目的に向かうために，主張だけでなく譲歩が要る。そもそも個々人が描いている音楽の理想も違う。たとえアマチュア集団であっても，この当たり前である個性と調和は真剣であればあるほど永遠の課題となる。それでも「やりたい」「成就したい」と思うのは，人



図5 デルマトオーケストラ3名の幹事たちと。左から、柳生理映子、筆者、福永有希、吉田亜希(敬称略)。

の感性のもっとも高いところにあるハイな瞬間と一緒に味わうことができるからであろう。

当日は先述の「平成30年7月豪雨(通称、西日本豪雨)」の最中であり、西からの団員はそれぞれたいへんな思いをして駆けつけてくれた。とくにこの曲にとって大事なホルンパートは、鶴田大輔先生が新大阪で2時間近く粘って新幹線に乗ってくださり、大阪市立総合医療センターの後藤仁志先生は滋賀からタクシーで駆けつけてくださった。

この演奏会の実現に当たって1年以上前から、浜松医科大学出身でそれぞれに皮膚科医として活躍されている柳生理映子、吉田亜希、福永有希の各先生に幹事としてたいへんご尽力をいただいた(図5)。全国から集まってくださった皮膚科医の方々、その他の医療関係者、賛助出演いただいている方々、そして指揮者として演奏をまとめてくだ



図6 島内隆寿事務局長の笑顔

さった岡 輝明先生(教育セミナーの病理の講演者でもある)の献身的な貢献にも感謝を表したい。楽団員は全国から(実はお一人は韓国から)集まってきたため、また忙しさもあり、全部で4~5回しか練習できなかったが魂は注入できたと思う。当教室では、ヴァイオリンの森木睦、トランペットの青島正浩、トライアングルの伊藤泰介の各先生も活躍した。私自身はフルートを吹きながら最後の30小節くらい胸が一杯になったことを告白しておこう。

おしまいに

本学術大会は、島内隆寿病院講師(図6)が事務局長として大活躍し、全体の事務を医局員とともに行ってくださった(図7)。その他事務を補佐してくれた石川雅代さん、水島きよみさんにも感謝したい。



図7 学会終了時の教室員集合写真